

教文通信写真館

ニラの減数分裂 顕微鏡写真



写真とエッセイ：綿貫京子さん（理科教育研究会 中野立志館高校）

ニラの減数分裂

8月中旬から9月に観られる、1.5～2cmくらいのニラの花序を使います（ニラ坊主）。坊主の中に20本ほどのつぼみが入っているので、茎の長さも含め9mm～11mmくらいのつぼみを使います。つぼみの中にある、薬をつぶして観察するとみられることがあります。道端に咲いていることも多く、強い植物なので育てやすいです。 続きは8p

教文通信

発行所 長野県教育文化会議
発行人 田澤 秀子

今号の記事

- 01-05 2025 長野県教育研究会①
06-07 学校保健全県研究会報告
08 開かれた学校づくり全国交流会
教文通信写真館エッセイ（つづき）

深く深～く学んだ一日

ワーク形成から考える貧困と学校一調査とおにわの事例からーと題して講演をしました。沖繩の厳しい貧困問題に関わって「不登校」「性虐待」「10代の母親」など事例を示し、「おにわ」での信頼を通じた支援を紹介されました。支援や教育の現場で子どもの立場に立つ「トラウマの視点」が、支援者にとって孤立無援の状態に置かれる子どもの回復ルートを描くためには必要だと話されました。講演の後、20分科会が開催されレポート報告を基に研究討議が行われました。2025年度は昨年までの28分科会を再編した初年度でしたの

長野県教育研究会が11月2日に開催されました。2025年度は、長野県吉田高校、長野県教育会館での参集とオンラインを併用して実施しました。教育会館の全体会では、大会委員長の細尾俊彦さん（高教組委員長）から挨拶があり、続いてオンラインで記念講演が行われました。講師は上間陽子さん（琉球大学教授、特定妊婦の出産応援施設「おにわ」事業主）が「女性たちのネットワーク



で、今後検討を行いより良い分科会運営を目指します。参加者は、全体集会は約220名、分科会は約270名の参加があり、昨年から微減しましたが、レポート数は113本と昨年より増加しました。県教研から「教育のつどい」（全国教研）へのレポート推薦があり、2026年度に全国での報告が予定されています。多忙化の中、教研への参加が難しくなっていますが、教職員が学び続けることが生徒への教育を創造的なものにしていきます。次年度の県教研、支部教研への参加をお待ちしています。

2025

# 長野県教育研究集会開催

11月2日(日) 長野吉田高校・長野県教育会館

長野県教育研究集会 課題提起(要約)

### 1 はじめに

平和や人権擁護の重要性が世界各地、日本国内で高まっている。2025年は広島・長崎への原爆投下から80年にあたり、2024年は日本被団協がノーベル平和賞を受賞した。核廃絶を求める声が世界に広がりがつつある。

日本国内では排外主義が公然と叫ばれ、多様性、公平性さらに包括性擁護に反する動きが出てきている。フェイクを真実のように装う主張が喧伝され社会正義にもとる主張がなされている。平和を守り真実をつらぬく理念の元、この動きに対抗するため民主教育をすすめる教育実践をどのように展開するか議論を重ねることが重要。

### 2 格差社会における教育

物価高騰は収まるどころか再燃傾向が鮮明。生活環境が厳しさを増すなかで、生活の困窮が進んでいる。子どもの貧困率(17歳以下)は11%で、OECD37カ国中19位、ひとり親世帯の貧困率は36カ国中32位。「ひとり親世帯」では「子どもの貧困率」が50%、「母子世帯」では4.4%と過半数が貧困の問題を抱えている。2025年度に「高校生等への修学支援」で授業料無償化が実現したが、臨時支援金の運用で公立高校単位制の定時制、通信制には上限18単位(年間)までしか支給されないことが判明した。臨時支援金は単年度措置で、無償化財源を法人税増とする税案が検討されているが、2026年度以降の状況は白紙状態。

### 3 子どもの権利条約を

生かすために

日本政府による「子どもの権利条約」批准30年後の2023年4月「子ども基本法」が施行され、生徒の社会参加と意見表明権を国の責任で推進することになった。「子どもの権利条約」の4つの原則の理念を社会全体で共有し具体化することが重要。「こども基本法」は国と地方自治体に施策実施の責務を示しているが、財政措置が課題。困難な状況に置かれた子ども・若者が多く、彼らの声が社会に届きにくい現実を変えていかなければならない。

### 4 次期学習指導要領について

授業時数削減等による課題の解消が喫緊の課題。「質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方」「多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方」等が審議され、「論点整理」にまとめられた。現行の指導要領の一層の具現化を図るとしている。植田健男氏は「今回の改訂で最大の課題は教育課程をめぐる問題」であり、学習指導要領が「一つの動かし方ができない道」として忠実に実行されているかどうかを確認されている状況があると指摘している。

### 5 教育のデジタル化について

PISAの調査では、「PCを学校で適度利用する生徒は成績がやや良い、頻繁に利用する生徒は、ほぼ悪化する」と分析されている。ユネスコは「指導がリモートのみでおこなわれる場合に生徒間の学習格差が拡大する。」等を報告している。GIGAスクール構想は教育産業が教育現場での「市場」を提供し、オンラインコンテンツは授業のスタンダード化や画一化、教員の脱技能化へとながる可能性がある。





### 6 教職員を取り巻く状況

OECDのTALIS2024(国際教員指導環境調査)で教員の相互信頼度が調査参加国中で最も低下、同僚との教材のやりとりの割合が減少という結果が出た。子ども一人ひとりに寄り添う教育的配慮や教育的価値を保障し、教育の質を維持するために教職員増や少人数学級の実現が急務であり現場の必要に応じて予算措置がなされるべき。

### 7 子どもを取り巻く状況

国連子どもの権利委員会は、「高度に競争主義的な学校環境が、就学年齢にある子ども間のいじめ、精神的障害、不登校・登校拒否、中退および自殺の原因となることを懸念」、「あまりに競争的な制度を含むストレスフルな学校環境から子どもを解放することを目的とする措置を強化すること」と政府に勧告した。ユニセフによれば、2022年、38か国中、日本は精神的幸福度は32位、身体的健康が1位という結果。2024年10月に公表された文科省調査では、高校における不登校生徒数は過去最多の8万8770人。「いじめの認知件数」「いじめの重大事態の発生件数」「暴力行為の発生件数」も最多となっている。2024年の小中高生の自殺者数は529人と過去最多。G7各国の10〜19歳の死因順位で1位が「自殺」となっているのは日本だけ。長野県では15歳から39歳における死亡原因の1位が自殺で、20歳未満の自殺死亡率は全国2位。青少年の自殺をなくすためには、学校や地域、社会が協力して包括的な支援や対応をすることが必要。

### 8 学校の統廃合と特色化

知事と教育長は連名で「学び・教育改革に臨む私たちの決意」を発表し「子どもたちが主人公の『新しい当たり前』を創っていく」と宣言、2025年度以降これまでの「議論」を「実行」へと移していくとした。「県立高校の特色化の推進事業」が提起され、具体的な施策の「実行」が始まっている。「スクールミッション」と「三つの方針」の策定・公表の義務化、普通科解体が行われ「多

様化政策」が強化された。学校の「類型化」や生徒を「偏差値的な学力」で選別・排除することにさせないための議論が大切。高校再編での新校の議論においても、学校の「特色化・魅力化」「多様化」競争に与るのではなく、憲法的価値に基づく「共通教養」を目指す高校教育を展望することが必要高校の再編統合と地域存続が深くかわる中、高校の在り方が問われている。

### 9 討議の研究と視点

(1)「子どものいま」をとらえてその背景を探ろう  
子どもの貧困と格差、デジタル機器への依存、児童虐待・性暴力、不登校など、子どもを取り巻く環境や子どもたちから表出する言動は様々。環境が子どもたちに与えている影響、子どもの姿や行動に表れている事象の背景は何か。そして、子どもたちが抱える生きづらさとはどこからくるのかを議論の中で明らかにしよう。その中で、子どもに寄り添い、励ます教育実践を交流しよう。

(2)子どもの「学び」について語り合おう  
学習指導要領には、育成すべき「資質・能力」や「主体的・対話的で深い学び」が協調されている。これは子どものためのものではなく、国や企業が求めるグローバル人材の観点からの教育課程編成をめざすもの。私たちがめざす、人生を生きる主権者としての子どもの成長・発達のために何が必要なのか、教育課程の自主的な編成、授業実践について討論し、研究を深めよう。

(3)憲法・児童憲章・子どもの権利条約の理念を生かした学校づくりのあり方を討論しよう

憲法、児童憲章、子どもの権利条約の理念を生かした授業づくり、学級づくりはどうすればよいのか。参加と共同の開かれた学校づくりについて討論し、実践を交流しよう。

課題提起全文は、県教研ウェブサイトにて



## 記念講演 「女性たちのネットワーク形成から考える貧困と学校 ～調査とおにわの事例から～」 上間陽子さん（琉球大学）

### ○沖繩の子どもをとりまく状況

沖繩は貧困問題が厳しい。2018年に亡くなった翁長前知事は貧困率の調査を指示。自治体トップが自分の責任で対応したのは全国でも稀な例ではないか。その結果、約3割の子どもが貧困状態にあることが分かった。市町村の貧困率と就学援助率が必ずしも相関していない―学校と自治体のとりくみに差があることも分かった。その後、県が広報やフライヤー配布をするようになって変わりつつあるのが沖繩のここ10年。

不登校も小学校は沖繩がワースト1位。7月には大麻等所持で中学生が逮捕された。いわゆる「ゾンビたばこ」等で10〜20代の摘発が大幅に増えているが、貧困の問題も背後にある。自分の生きづらさに対して意識を飛ばしたい子どもたち。薬物ネットワークに子どもが接触している実態に手立てがない大人たち。加えて、米軍基地の問題が大きいのではないか。基地経由の郵便物などで簡単に流入してしまうことから、今後は学校の中でも大きな問題になると思う。

沖繩ではこの間、学校の「外」―無料学習塾や子どもの居場所づくりなどに力を入れていて、子ども食堂の数は全国1位。その中で「能力のある子」は学校に戻し、「能力のない子」はキャリア教育へつなげる傾向がある。子どもの能力や生活を査定する場が社会に蔓延しているとも言える。本来、子どもを包括的に捉え支える場である学校の公共性を復活させていくことこそ必要な

のだと思っている。しかし、考えるのは「教師は子どもの話を聞いているか」「大人は子どもの権利を守っているか」ということ。「子どもの話は圧倒的に聞かれていない」「大人は教育や保護の名のもとにトラウマを与えたり権利侵害を隠蔽したりしている」のではないか。長野の状況も一緒かもしれない。

### ○調査事例から

10代でママになった子たちがどんな思いを持っていたか、学校時代どうだったかということ聞き取ってきた。調査において「性虐待の告白」が多い。性虐待が「ある」という前提で聞き取りをしていることと、出産前後の医療行為に伴う身体拘束は性虐待の場面と似ていて過去の場面がフラッシュバックしやすいためか。

小学生の時から兄にレイプされ、中学生で「みんなはレイプされていない」と気が付いた子の事例。自分の家で起きていることがしんどくて友だちに話すのが、中学生には抱えきれず友達が言いふらしたため先生の耳に入ってしまった。聞きとりされた時、嘘だと叱責されてしまう。家族内で性暴力が起きているなんてあり得ないという思い込みから。「大人には言えない、とその時思った」と彼女は言う。子どもの声を聞き取れない教師が評価されることがあるということを示している。

兄相が里親委託を解除してしまった事例にも関わった。「実親が望んでいる」という理由だけで、愛着形成期にある5歳の子どもが里親から引き離された重大なトラウマ事案。その子が泣き叫ぶ姿も報道されたが、「泣き叫ぶ」という子どもの主張が無視されている。その後調査に入り、子どもの主張や意見を関係機関が踏みにじったものと総括して報告書を提出した。

県立高校空手部キャプテン自死事案の第三者調査委員会にも関わった。顧問教師は前年度セクハラ事案があり、登校できない子がいたにも関わらず指導者として評価されていた。キャプテンに無理な雑用を多く命じたり、「顔も見たくない」等の暴言を投げたりして自死に追い込んだのだが、大きな事件の前に別の事件があっても教師間

でそれを告発できない、問題視できないという状態。

子どものトラウマは澱のように溜まっていく。トラウマとは、自分ではどうしようもない力に屈服させられること。その瞬間だけでなく、その後の人生に染み渡ってしまうことが問題。映画やドラマでトラウマ論やIFS理論を踏まえた作品が作られるようになってきたが、教育や学校現場はその観点で子どもを見ることはほとんどなく、みんなで学習しながら進める必要があると思う。

### ○女性たちの調査の話

10代でママになった沖繩の女性77名を調査した。風俗で働く女性たちは、学生時代ヤンチャだった子が多い。学校に違和感を覚えて、学校という公共の場から抜けてしまう。一番の弱点はピア（対等な仲間）の作り方がわからないこと、もう1つは社会に対する信頼を作り切れないこと。

中卒でキャバクラで働く涼音さんは、小学校の頃から不登校傾向があったが、行かなくなった日のことをはっきり覚えていた。部活が大好きで、給食の時間に登校して部活をやって帰るといった日々だったが、顧問が「他の子に示しがつかない」といって部活をやめさせた。学校へ行く意味がなくなった彼女はキャバクラで働きはじめ、中2で妊娠、一人で愛知に出て働き20万円稼いで中絶手術を受ける。親族の複数の大人や新しい父親からの性暴力も受けているが、彼女はそれを性暴力と思っていなかった。犯罪だと教えてくれる大人が周りにいなかった。こういう子を「示しがつかない」だけで公共の空間から排除すべきではない。厳しい状況にある子ほど、自分でやってきたという自負もあって、支援の介入が困難になる。こういう状況を捉える最前線は学校しかない。

りのんさんは高校中退だが、中学校で辞めるのと高校で辞めるのでは全然違うと思った事例。彼女の場合、学校を通じて大人に対する一定の信頼感があったことで、ワンストップ窓口を通じて警察や弁護士など関係機関の支援につながった。適切な行政サービスや治療のために評価は大切だが、彼女たちの頑張りや思いを読み取れない

出産応援施設「おにわ」をつくる

オリオン奨学財団の助成金(800万円)＋全国からの寄付(2021年スタート:10代のママ対象)

「妊産婦等生活援助事業」(2024年)へ



沖縄銀行 鳥取支店 普通口座  
1442256 公益財団法人みらいファンド沖縄 代表理事 小坂 夏 志保シンブルマザーを応援する「おにわ」実証基金「みらいファンド」沖縄 (oceanland.org)  
みらいファンド沖縄 (mirai@fund.or.jp)  
\* 寄付金控除で寄付金の4割が寄付者に戻ります。



様々な調査をしながら考えていたこと

—教師は子どもの話を聞いているか？  
—大人は子どもの権利を守っているか？

大人は、圧倒的に子どもの話を聞いていないし、子どもにトラウマを与えている。トラウマを与え、権利侵害をしていても、それを教育や保護の名のもとで隠蔽している。



いどトラウマの治癒にはならない。支援や教育の現場でトラウマの知識は必要。J・ハーマンは「トラウマとは自分で決めることを奪われ、どこからも助けがやってこないと思われ、孤立無援の状態に置かれること」と定義している。トラウマからの回復は「安全な場所、自分で決めることを増やし、助けがやってくるということがわかる」こと。回復のルートを支援者が描くことはできない。その人が自分で決めることが大事。その際、公教育の中で成功と失敗を重ねる中でピアグループが作られることは本当に大きな意味を持つ。翼さんと美羽さんは中学校時代の友だちで、同じキャバクラ店で働いている。翼はネグレクト家庭に育ったが、中学校には毎日行っていた。翼は16歳で結婚・出産を経験、妊娠中から夫にひどい暴力を受けていた。ある日、鼻の骨が折れるほどの暴力を受け、美羽が助けに来てくれたんそう。ピア＝美羽と話す中で初めて「逃げよう」「離婚しよう」と思ったそう、支援者がいなくても助けてくれるネットワークが作れるんだと思った事例。

京香さんは15歳で第一子を出産。キャバクラの接待で妊娠し、私のところにすぐ連絡がきた。彼女は家族の稼ぎ頭だったので妊娠継続はないと即座に判断し、中絶手術の立ち合いなどはしたが、包括的な支えは友だち。中学校の友達であるミナミさんは、自分が妊娠したとき、中絶した京香さんに「やー(あなた)の子どもがわー(私)に移ってきたよ」「だから面倒みれよ」と言ったそう。京香さんは「はい、みます」と。17歳がこんなこと言えるのかと驚いたが、ピアは学校で育つ。

街の調査をしていると分かるが、匿名空間の関係はリスクがある。学校は身体が見えるし毎日会える、そして大人もいる稀有な空間。これを手放してはいけないと強く思う。

○学校ができること

学校の友達が助けてくれたという話が減ってきたと感じ、自分で出産応援施設「おにわ」を立ち上げた。助成金や全国からの寄付で10代のママを対象に開設。玉城デ

ニ一知事に、「これは本来政治の力でやること。生死に関わることを民間でやるのはおかしい。でも間に合わないので先行してやっている」と提言し、2024年からは妊産婦の生活援助事業として、県と国庫のお金で運営している。

「おにわ」の中心に置いていることは、利用者の思いを聞くこと、やりたいことを一つでも増やして実現できる方法を考えること。ウェルカムな雰囲気や心地よさを感じられるように空間を作っている。スタツフと決めていることは3つ。厳しい話が多いからこそ好奇心と関心を大事にする、関係機関との会議の際にママの言いたいことを代弁する、自分自身のケアを大事にすること。スタツフは利用者のクレームを「異議申し立て」「その人の力」として受け止めていて、すごいなと感じる。厳しい状況の利用者も多いが、少しでもいい時間を過ごした記憶を徹底的に作るうということをやっている。

「おにわ」のとりくみを見て「施設だからできるのでは？」と言われることもあるが、学校はやっぱり得だなあと思う。開いているだけで子どもが来て、いろんな体験ができる、と。

保健室で使った効果があったのが『ころろからだコンディションカード』。これを使うと気持ちが説明しやすいと気づいた子が、他の子にも使ってあげていた。「たすけてほしい」を示した子が児相へつなげた事案もある。子どもの感情の補助線として使えらると思う。

今年、琉球大病院ウエルビーイングセンターの仕事を引き受けたのは、不登校支援へのとりくみとしてホースセラピーのモデル事業をやりたいと思ったから。夏、馬と一緒に泳いで、手作りのおにぎりを食べて…と、心地よいことを子どもたちと一緒にやっている。

トラウマという観点で子どもたちを見ていくと、やらなきゃいけないことがたくさんある。その人の「今・生きていく時間」をどう充実させるかを大人は考えないといけない。すべての場所で実践を考える必要がある。その際、公教育である学校は可能性をいっぱい持っていると思う。

#### 4. 講演 新保 文彦 様 「”気になる生徒”への理解と対応」

- 普段何気なく生徒と関わっていますが、今後は”立ち位置”を考えてみようと思いました。
- 発達障がいの子が多いので、サポマネさんの存在を知ることができて良かったです。
- ロールプレイが、簡単なものなのにどれもとても楽しかったです。立ち位置に関して、あまり意識をしたことがなかったので、意識しながら仕事をしたいと思いました。
- 距離感のとても近い生徒がいるため対応に悩むことがあったが、今日お話を聞いて、実践をしてみようと思いました。
- 短い時間でしたが、福祉の行政サービスや保健室に求められる役割、新保先生に教えて頂いた立ち位置を意識して職務にあたらそうと思います。
- コミュニケーションをとる上で、聞き方や話し方を意識することが多かったのですが、先生のお話を聞いて、立ち位置も重要な要素だと学びました。
- 隣の方とコミュニケーションを交えた講演、とても良かったです。
- 保健室が安心・安全な場所であるようにしたい。
- 気になる生徒を思い浮かべながら話を聞くことができました。



#### 5. グループ討議(内容) ★話題になった内容を抜粋しましたのでご覧ください★

##### 特別支援・相談体制

- 研修は受けているが、生徒が多様化していて対応が難しい
- 一定の距離を保ちながら生徒が安心できる場所をつくっていききたい
- 配慮の線引きが難しい
- 特別支援コーディネーターとの関わり方
- 職員の支援に対する理解度の違い
- 講演の”立ち位置”の話から生徒と教員の距離感を考えさせられた
- 相談室の有無・常駐職員の有無について。保健室以外で生徒が安心できる居場所づくりが必要

##### 保健主事

- 保健主事に、こまめに相談に伺ったり、職員会での提案を主事に任せている。
- 仕事内容を理解してもらうことが大切。まず仕事内容の説明から。
- 教諭という立場で学校全体が見えている主事と協力していく必要あり。養教が一人で抱え込まない

##### スポーツ振興センター(JSC)

- JSCに加入しない家庭もあり、手続きが煩雑になった。県で統一した対応を周知して欲しい
- 学校でのケガの場合は申請をするよう強くお願いをするが、断られるケースあり
- 通学途中の交通事故について、自賠責対応での不足分があればJSCで対応してもらえる
- 少額で受診できることから申請しないケースが多い
- 自転車事故がとても多い

##### 応急処置

- 地区の仲間とヒヤリハット事例を共有したり、上級救命講習を受ける。
- 書籍やサイトで最新の医療情報を収集するよう心がけている
- 救急バックを持ち寄り中身を見せ合う
- 地区で整形外科へ研修へ行った
- H29.30部会で動画視聴、支部で借りることもできる

##### 他にも・・・

生徒対応について、献血、学校医との連携、安全衛生委員会etcが話題になっていました。

##### 討議の感想

- 学校の様子や生徒の情報交換など地区を越えて話ができとても良かったです。
- 時間が足りないと思うくらいでした。若い先生が増えてきたので、聞きたいことを聞けるグループ討議は続けて欲しいです
- 意見が活発に出て、参考になるお話が多くなりました。
- 参考になった・良かったとの感想を多数いただきました。



グループ討議の様子

# 学校保健研究会 全県研究会

250806 塩尻総合文化センター

## 学校保健情報

2025年8月(No. 4)  
第539号  
教育文化会議学校保健研究会  
(担当: 高水・須坂)

8月5日、塩尻総合文化センターにて第101回学校保健全県研究会を無事に開催することができました。  
総勢57名の会員の先生方にご出席いただき、大変充実した研究会となりました。ありがとうございました。当日のアンケートをご紹介します。

### 1. 全体の運営について

- スムーズな進行で、安心して学びに向かうことができました。
- 充実した研修の一日でした。
- 会場が広々としていて、スクリーンが大きくて見やすかった。
- その他運営について、「良かった」というご意見を多数いただきました。



小林研究会長 あいさつ



開会行事の様子

### 2. 実践報告について

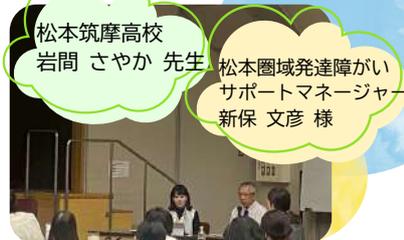
- 3名の先生方の実践をお伺いできてとても勉強になりました。「ちょっと勇気を出して踏み出せる」という言葉を生徒達が持てるよう、サポートしていきたいと思いました。
- 日本との違いを学ぶことによって、自校の生徒対応に活かそうとの考えは素晴らしいです。
- 事例を挙げて具体的に話をさせていただき、わかりやすく勉強になりました。発達障がいサポートマネージャーとの連携も素晴らしいです。
- 養護教諭ももっと柔軟に保健室内に留まらず視野を広げるべきだと実感しました。
- 毎回実践報告を楽しみに参加しています。
- 志を高くお持ちの先生方の思いや、実践を聞けて実りある時間でした。



上田高校定時制  
茨木 洋美 先生



小諸高校  
中田 由美 先生



松本筑摩高校  
岩間 さやか 先生  
松本圏域発達障がい  
サポートマネージャー  
新保 文彦 様

### 3. 講演 日戸由刈 様 「思春期の特徴を知って、”折れない心”を育む」

- 自分たちは、人間の発達の中でも特に難しい思春期の子どもたちを相手にしている、ということが確認できました。どんな声かけがいいのかな、どんなふうに伝えたらいいのかな、といつも悩んでいます。笑顔で、優しく、発達を促していきたいと思いました。
- 人を信じる力、人を頼る力は大切だと改めて感じました。自分の苦手なことも堂々と話せる場所・話せる信頼関係をつくりたいと思います。保健室がサードプレイスになるようにしていきたいです。
- 発達に特性のある生徒は自尊心や自己コントロールが実年齢の半分くらいの水準とお聞きしてすごく納得しました。
- 自分の興味や得意なこと、将来の夢など自信を持って語れるよう自己理解を深めて行く助けができたと思います。
- 折れてしまう前に、きちんと生徒と向き合うことの大切さを学びました。
- パーソナルポートフォリオがとても良い取り組みで、やってみたいと思った。
- 自分自身にも響く講演でした。養護教諭として、選択肢を出してあげること、焦らないこと 生活習慣を基盤として子供自身に実行機能を育てさせることを意識して日々業務に取り組みたいです。
- レジリエンスについて、より具体的に分かりやすく説明をさせていただき、理解が深まりました。「援助と先回りは違う」というお話にハッとさせられました。



相模女子大学  
教授  
日戸 由刈 様

## 第4回教文総合研究会 子どもの権利条約を生かした参加と学校の学校づくり

子どもの権利条約批准 31 周年。「こども基本法」が一昨年スタートし、「こども大綱」のアクションプラン「こどもまんなか実行計画」が策定され、全国の自治体では「子どもの権利条例」制定も広がっています。子どもの権利条約を生かした生徒・保護者・教職員の参加と共同の学校づくり、生徒参加の地域づくりをどう進めていくか、長野県下の実践報告を中心に交流します。

1. 開催日時 2025年12月6日(土)13:00～17:00 7日(日)10:00～13:00
2. 開催場所 長野県高校教育会館(〒380-0838 長野市県町593)(オンライン併用)
3. 参加費 無料 教職員・生徒・市民、、、どなたでも参加できます。
4. 参加申込 右のQRコードからお申し込みください。



**長野県教育文化会議  
第4回総合研究会**

校則について考える、地域に出て活動する、協会に調べる、、、長野県内で生徒・教職員・保護者、そして地域とともにとどまれた「開かれた学校づくり」。その取り組み報告をもとに、長野県内、全国からの参加者とともに生徒を中心とした学校づくりや地域づくりに関して考え、学びます

開かれた学校づくり全国交流集会と合同開催  
**子どもの権利条約を生かした  
参加と共同の学校づくり**

**日時** 2025年12月6日(土) 13:00～17:00  
7日(日) 10:00～13:00

**会場** 高校教育会館 RINKS593 オンライン併用  
〒380-0838 長野市県町593 TEL:026-234-2216

**申込** どなたでも参加できます  
参加申込はメールまたは下のQRから

参加  
無料

12/6(土) : 全体会  
松本市立丸ノ内中学校「自由憲章校プロジェクト」  
岡谷高校「PTA協議会」 辰野高校「三者協議会」  
箕輪道徳実践「箕輪未来シンポジウム」 松本深志高校「謙遜の自治」  
12/7(日) : 分科会(学校づくり 地域づくり 生徒・学生交流会)  
佐久市立野沢中学校  
伊那北高校 小海高校 軽井沢高校 中野西高校 松川高校 大町島島高校

開かれた学校づくりの3観点。1.児童生徒、保護者、教職員、市民など、学校にかかわるすべての人々が参加する学校づくり。2.様々な学習・生活上の困難を抱えた子どもたちへの適切な支援により、すべての子どもが安心して楽しく学ぶ学校づくり。3.子どもの声を聴くおとなの側の共同性と専門性を発揮した子どもに最適な学校づくり。4.保護者、児童生徒、教職員による「学校の自治」を尊重する「開かれた教育委員会」を求め地域の人々がいっしょにすすめていく学校づくり。5.市長、議員等と連携した地域づくり。まちづくりにつながる学校づくり。

教文会議 | 長野県教育文化会議 | TEL : 026-234-2216 | Mail : kyobun.nagano-h@educas.jp

「開かれた学校づくり」全国連絡会主催

◆今年第24回「開かれた学校づくり」全国交流会(12/6-7)の分科会の一つとして開催されます

## 第3回 生徒・学生交流会

『学校づくりの主人公は生徒だ!』

「こんな学校にしたいなあ」「もっとこんなことをしてみたい!」  
皆さんの学校生活での悩みや思いを、全国でさまざまな活動に取り組み中高生や、大学(院)生と一緒に話し合ってみませんか?

～当日のスケジュール～

**第一部 実践報告**  
三者協議会などの、生徒による学校づくりの実践報告です

**第二部 しゃべり場**  
テーマ別に分かれて全国の高校生・大学生と交流します!  
テーマは生徒会活動・大学生生活・進路についてなど!

**開催日時・方法**  
2025年12月7日(日)  
10:00-12:30

対面: 長野県高校教育会館  
オンライン: 後日ZOOMの情報をお知らせします

▼参加は次のQRコードから

◆応募締切11月30日

最新情報は右の公式Instagramから  
▶hgseitogakusei

「開かれた学校づくり」全国連絡会  
・email: hg\_seitogakusei@gmail.com

### 「教文通信写真館」つづき

減数分裂は、専門生物の最初の「生物の進化と系統」の単元で扱います。

減数分裂とは、生殖細胞を作るときに起こる特別な細胞分裂のことです。通常の体細胞分裂とは異なり、染色体の数が半分になるのが特徴です。そして、おしべの染色体nの遺伝情報とめしべの染色体nの遺伝情報が、受粉して2nになって成長していきます。教科書によく出てくる、ヌマムラサキツユクサや、ムラサキツユクサは、6月くらいのお小さなつぼみが良いです。シンビジウムは、冬の球根の時に減数分裂が行われています。バッタもよく教科書に出てきますが、9月の成虫になる前、7月末頃の2cmくらいの子供バッタでないとみられません。成虫では分裂が終わっています。どれも、プレパラートを作って観察してみるまで、減数分裂が見られるかわかりません。

また、花のつぼみなら何でも良いかという、そうでもありません。染色体がはっきり見える植物はそれほど多くありません。また、つぼみを固定保存していてもどんどん染色体が壊れて、それほど持ちません。さらに、生徒全員にいきわたるだけの材料でないとはいけません。

たかが1時間の実験ですが、時期や準備にすごく気をつかう実験です。

観察するのはとても大変ですが、観察できると、すごくうれしいので自慢してみました。